



岐阜県教育懇話会  
〒503-0023  
大垣市笠木町229-5  
(0584)91-2478  
口歴番号 00800-3-5390

綱 領

われわれは歴史と伝統を尊重し、日本にふさわしい中立的な教育を推進する。  
われわれは教育と品格の向上につとめ、真実愛の精神とともに、明るく、能動的な教育を研究する。  
われわれは個人の自主尊厳を尊重し、政治的中立を厳守し、主体性を堅持する。

新年にあたって

「国防」を考える

岐阜県教育懇話会会長 橋本秀雄

明けましておめでとございます  
今年夏に日本教師会第61回教育研究大会を本会主管で開催することになっております。皆様の一層のご支援をよろしくお願いします。

昨年は新型コロナウイルス感染症、ロシアによるウクライナ侵略等と国内外の大問題に揺れた一年であった。それが子供たちにどのような影響を与えたのか、それを教育界はどう受け止めたか、子供たちの将来の糧としていくかを考えさせられる年でもあった。今年もウクライナ戦争が続き、高まる北朝鮮とシナの挑発や脅威にどう対処するのか、国防問題がこれからの最重要課題になると思われる。昨年の十一月二十四日付、朝日新聞朝刊に、「国を守る」を考える」という社説が掲載された。

社説の要旨は次のようであった。

「周辺国の状況から国民が日本の安全に不安を感じ、防衛費の増額に賛同するものもつともである。」

しかし、岸田政権の安保関連3文書は戦後の抑制的な防衛政策から大きな転換をするもので、先を見据えた幅広い視点で熟考すべきだ。

「国を守る」とは、基軸は「国民」であるべきで、「防衛力の抜本的強化」という力による対抗が突出した今の議論には懸念がある。

第一に敵基地攻撃能力を保有すれば「安全保障のジレンマ」に陥るし、憲法9条の精神に反し、地域の不安定化を加速する。

「国を守る」には、戦争を起こさないことにこそ、最大限の力と知恵を注ぐべきで、防衛力という備えの両輪にある外交力が今は不十分だ。

日本の現状を考えれば、有事への無理な備えは平時の国民を疲弊させることになる。「国を守る力」は防衛力だけでなく、経済力、外交力、情報力、科学技術力などのソフトパワーがあり、それらの調和ある総合力を

意形成が必要だ。」

岸田首相も安全保障の目標を「国民の命と暮らしを守る」こととしており、その点は朝日も同じである。だが首相の説明は言葉だけで本意に目的に適うのか疑問だとしている。

岸田首相が安保関連3文書を閣議決定し、防衛費を2%以上にすると明言したのは、それほど事態が逼迫しているのである。森本元防衛大臣などはその決断を賞賛している。

しかし、朝日は戦後の安全保障体制のままでよいとして、防衛力を高めて相手に脅威を与えてはならず、9条を守って他国に「安心供与」をすべきだ。足りないのは外交努力であり、経済力や技術力、文化力を向上させて総合的に相手に侵略を思い止めさせるべきと主張している。

昨今、ミサイルが日本海や東シナ海の我が国のEEZ内にも打ち込まれ、これまでの安全保障体制では防衛力が足りないという現実を突きつけられ、多くの国民は不安を感じているのである。

目指すべきだ。その基盤は国民の理解、支持、協力で、丁寧な合

朝日の主張は米国が世界の警察官として安全を保てた時代に通った話であって、今では全く説得力を欠く。さらに問題は、「国を守る」とは一体何を守るのかという問いに対する答である。社説では「領土、独立、統治機構、自由や民主主義などの価値」をあげ、「いずれも大切だが、基軸は「国民」である」としている。国民に国を守る義務があることは、どの国でも常識であろうが、国民は守らるべき存在としか言わないのだ。

しかし、本当に守るべきは国の命ではないか。国の命とはそれを無くしては日本が日本たりえなくなるもので、我々を生み育てた民族であり文化・伝統である。そのエッセンスが朝日の嫌う「天皇を中心とした国体」と言っつよい。これは、戦前も今後も変わらない我が国の特色である。

日本の歴史を緋けば、多くの先人たちが国を守るために命を投げ出している。そのお陰で今日の日本があり私たちが存在している。その恩に感謝し、子孫にこの素晴らしい国を残していくことこそ、今を生きる者の務めであろう。

朝日の社説は戦後のゆがみを変えまいとするが、時代は変わった。今後は「国防」を国家運営の軸とするよう憲法を改正し、国民教育も根本的に変えていくべきと考える。

〈大会報告〉  
第八回 皇學館大学  
道徳科教育研究協議会研究大会

編集部

昨年十一月二十七日、皇學館大学において第八回道徳科教育研究協議会の研究大会が開かれた。

今年のテーマは「道徳科は子供の学校不適應を予防・解決できるか」であった。

開会の挨拶で主催者の渡邊毅皇學館大学教授は、「近年、いじめや不登校などの学校不適應の子供が増加している。現場では様々な取り組みが成されているが憂慮する事態となっている。そこで道徳教育や生徒指導で尽力し、成果をあげている実践者にシンポジウムで語ってもらい、道徳教育の可能性について会場の皆さんと研究協議をしていきたい。」と趣旨を述べられた。



○講演Ⅰ「感謝から始まるコミュニケーション」

講師は久保登條株式会社常務取締役 役平田勲久氏で、氏の先祖平田勲氏は宝暦四年（一七五四）、濃州（岐阜県）・尾州（愛知県）・勢州（三重県）

にまたがる木曾三川の治水工事を指揮した薩摩藩の家老であった。

工事は徳川幕府へのお手伝い普請であり外様大名の財力を削ぐための政略であった。幕命に従うべきと主張した平田勲氏は千人の藩士を率いて工事を完成させるが、幕府の監査が終わると莫大な資金と多くの藩士の命を犠牲にしたことに切腹をして詫びている。薩摩にとっては幕府から受けた屈辱であり、明治に至るまで藩内で外を禁じられていた。

しかし、美濃地方では薩摩藩に感謝しており、平田勲氏をはじめとする藩士たちを薩摩義士と称え、犠牲者を弔ってきた。それは今日に至っても岐阜県と鹿児島県とが姉妹県の盟約を結び、様々な交流を続けていることにつながっている。

勲久氏は二七〇年も経つのにこうして感謝を続ける人々の姿に感激し、宝暦治水を多くの人に知らせたいと考えた。とりわけ子供たちに思いやりや感謝することの大切さを学んでもらいたいと紙芝居を自作し、小学校などで公演してきた。

氏はそうした先祖の事績から感謝は人と人をつなぐものと感じられ、感謝の言葉がコミュニケーションのきっかけになり、さらに進めるには言葉の使い方が大切とされた。親は子供に勉強をさせたいがため

に「勉強した？」とか「勉強しなさい」とつい言ってしまうが、親が子を信頼し愛情をもって育てておれば言葉で請求をしなくても、愛する親のために勉強しようと子供は思い励むものである。

こうした具体例を多く語られ、最後は「砂の上の足跡」という詩を紹介して話をしめくられた。

○シンポジウム「道徳教育は子供の学校不適應を予防・解決できるか」〈登壇者〉

市川啓（大阪産業大学非常勤講師）  
工藤弘（安曇野市立豊科東小学校教諭）

論

西浪聡郎（総社市教育委員会学校教育  
育課指導主事）

市川「ポジティブ生徒指導について」  
はじめに全米で広く実践されているPBIS（ポジティブ行動支援）の考えに基づいて日本の学校教育に合うように開発したPISA方式（登校のためのポジティブな生徒指導方式）について説明があった。

その手順は①「STEKKIアンケート」を実施、②「すてきな格好いいクラスづくり」、③「問題が起きてきた時の緊急対応」、④「緊急対応で解決しなかった時の遅延対応」で、①と②についての解説があった。  
①の調査は、不登校の恐れのある子供や深刻ないじめの早期発見をす

るためのもので、該当者があった場合にほめる言葉かけを行うなど、至急対応を行う。

②は積極的な生徒指導を行って登校したくなる学級をめざす。

ポジティブ道徳カードを用いてお互いにより行動を認めほめる活動を行う。そのために学級目標にかかげる期待される徳目を子供と相談して決め、どんな行動でそれが実現するかを一覧表にして教室内に掲示する。その項目にあてはまる行動を生活のなかから見つけ、その行動がとれた子供をカードに書いて相手に渡すようにするのである。

この方法で学級経営を進めている実践によれば、手伝いや協力が増えたり、困っている友達を助けようと感じたりといった顕著な子供たちの反応が出てきて、学級全体の学習意欲などが高まったという。そして不登校やいじめという問題事象は減少したという報告であった。

工藤「不登校児童生徒をゼロにする生徒指導・道徳指導」

氏は不登校の多い中学生の数を減らすには小学校段階からゼロを目指す必要がある、予防と緊急対応による「激減モデル」を提示された。

具体的には不登校には次の6段階があり、それに応じた指導が必要である。

- ① 「予防対応」
- ② 「初期対応(1日目)」 Ⅱ 登校力診断テストで該当する子への対応 Ⅲ 緊急親子面談
- ③ 「早期対応(3日目)」 Ⅱ 緊急親子面談
- ④ 「遅延対応(4日以降〜29日)」 Ⅱ タッチ登校。何を減らしたら少しでも来られるのか。軽減措置の実施。
- ⑤ 「事後対応(30日以降)」 Ⅱ タッチ登校。何をしたら来られるようになるのか。動機付け。
- ⑥ 「完全不登校(出席なし)」 Ⅱ 登校への手前のステップとして何ができるのか。

遅延対応で行ったことは、「感謝状・努力賞」と「たまP(たまったポイントカード)」の活用で、前者は毎日生活を振り返って、お互いに感謝の言葉、よく頑張っていたことを伝え合う活動である。たまPは親子面談で決まった90%実現可能なステップの目標を自己評価してできたポイントがたまっていくもので、両方とも連動して本人の自己効力感を高めていく。

この取り組みで不登校がみであった子もクラスに位置付き、いじめも防いでいけたし、安曇野市全体でこの方式を実施して、市の不登校出現率は全国平均より大きく下回る結果となった。

西浪「市内全校園で取り組む総社市だれもが行きたくなる学校づくりー不登校、問題行動の未然防止に向けた学級集団づくりー」

総社市では市をあげて包括的生徒指導(広島大学栗原慎「教授が提唱」の考え方で誰もが行きたくなる学級づくりを実践している。その柱は

- ① 「ピアサポート」 Ⅱ 異校種、異年齢交流等を通じたサポート活動
- ② 「SEL」 Ⅱ 社会的なスキルを身につける学習
- ③ 「共同学習」 Ⅱ グループで協力して学習に取り組む活動
- ④ 「品格教育/PBIS」 Ⅱ よい行為の習慣をつくる継続的な教育活動

それをすべての子供に行いながら、問題のある一部の子供にはSELとピアサポート活動を特に指導していくのが包括的生徒指導と言われる方法である。

ピアサポートとは行事などで、上級生が下級生をサポートしながら行い、サポートする側は役に立ちたい、協力したいという気持ちになって満足ができ、サポートされる側はうれしい気持ちや上級生へのあこがれを感ずるといった効果がある。

SELとは社会性と情動の学習で対人関係能力と感情のコントロールを身につけるものである。

共同学習は話し合い活動や学び合い学習で、すべての授業で取り入れることによりコミュニケーション量を確保し、人間関係を良好にできて学習意欲を向上させる効果がある。

品格教育はアメリカで広く実践されているPBISを日本の学校に応用したものである。岡山大学の青木教授は、「よい行為とはどのようなものかを知り、よい行為をとれるようになることを望み、よい行為を実際に行うことで、自分自身の生活をよい方に導いていくように支援する教育」と定義されている。

総社市では月別テーマが決まっております。全市でたとえば四月は「あいさつ」をテーマとし、子供たちは挨拶に関する自分自身の目標を設定して一ヶ月を過ごすのである。それは地域や家庭にも知らせるので、挨拶が出来たら親や周りの大人から認められるようになる。こうしてよい行為が増えていくことで問題行動を少なくするのである。

質疑応答

三名の実践報告を受けて、パネラー同士や会場からの質問や意見交換がなされた。

① 「ポジティブ道德カード」は確

かに不登校の子には効果があるが非行型の子供には反抗的となって伝わらない。

↓あべれるのは数分間。得意な面で活躍をさせてほめる。

② 「ほめ方について」

↓アメリカではほめ方を決めていてそのうち一つを選ぶ。

不登校の子は上からほめても変化しない。ほめる・しかるの練習をして、レパトリーを広げる。

③ 「道德カードをもらえない子に どういう指導をするか」

↓教師が良い行動を見つけてカードを渡す調整も必要。道德の授業の中で友達の良い点を見つけては素晴らしいことと称揚して雰囲気づくりをする。

④ 「完全不登校の児童生徒には どうな働きかけをすべきか」

↓踏み出すにはステップがある。部屋から出られない子は一步部屋から出るといのが最初の段階。

⑤ 「総社市のように地域全体で取り組むことが大切だが、どのようにして広めたか」

↓始めは赴任校で実践していたが、成果をあげるようになり、他校で講演などをして広まり、さらに同好会が出来たり、県の研修会で紹介したりして市全体で取り組むこととなった。

(編集部)

講義II

「家庭ではぐくむ道徳力」

一般財団法人倫理研究所 丸山敏秋

なぜ今道徳力か

現在、我々は間違いなく大変動の時代に生きている。二五〇年ほど前に西ヨーロッパで生まれた「近代文明」が揺らいでいるのだ。

変動の時代に生き抜くためには、人間力を高めねばならない。その根底に「道徳力」がある。

道徳とは是非善悪という価値に本質がある。人は一人では生きていけず、多くの人と関わりをもつ。その中で秩序をもって安寧に過ごすためには法律だけでは保つことはできない。教育によりヒトを人にし、よき人に育てることが不可欠である。教育には四つの面がある。

		子供	
		意識	無意識
大人	意識	教化	感化
	無意識	倣化 ほうか	薫化 くんか

が子供の人格に影響すること

「教化」しつけ  
「感化」大  
人の影響  
「倣化」大  
人のまね  
「薫化」両  
者が無意  
識のうち  
に雰囲気

道徳教育においては、親や教師はまず人が自立して生きる上で大切な諸価値を示し、その「価値の鑄型」に子供を導き入れる「教化」が必要。次に親や教師はみずから道徳力を高めることにより子供たちに「倣化」「感化」「薫化」させることである。

家庭教育の基本

人間は未熟児の状態で生まれる。その時から一人で生きることが出来ない。様々なレベルで他の人と一緒に過ごしながら一人前になっていく。その中核が家庭であり、家族である。さまざまな能力、知力、体力、感性のベースは乳幼児期の親などの愛着と否認的な心の発達にある。

気をつけなければならないのは、子供は小さな大人ではないことで、生活のリズム（ゆつくり）が違い、大人にない能力（集中力など）をもつ。特に七歳までの子供前期は肉体を発達させながら模倣衝動で生きている。そこで親自身が生き生きと生きていることが大切。夫婦の信頼、仲の良いことなど。その環境の中で子供は生き生きと精一杯生きる。親子の間には「見えない通路」がある。そのため子供が小さい時ほど親を映す。親の言うとおりに育たないが、親のするように育つと言われるとおりで、実は夫婦も向かい合

った鏡のように相手を映している。暖かく、穏やかで、和やかで、澄んだ家庭の空気が子供の人格に浸透する。それが「薫化」である。「薫化」がしっかりとっておれば家庭教育は大丈夫。子供の問題は夫婦関係を改善することで概ね解決する。離婚などで家庭を崩壊させることが最も問題である。

子供の育て方にマニュアルはない。うまくいったケースをまねるより、医療と同じように子供の生命力を信じ、「自助努力」で育てることが大切。病気に対して免疫力を高めるように、道徳力を磨き養うためには、第一に感性を磨くことが大切。

お知らせ

令和五年度岐阜県教育懇話会総会  
期日 三月二十六日(日)  
午前九時半〜総会  
午前十時十五分〜記念講演  
場所 岐阜市ハートフルスクエアG  
研修室30  
演題 「蒲生君平に学ぶ」(仮)  
講師 蒲生君平研究家・博士(文学)  
阿部邦男 先生  
※「蒲生君平」とは江戸時代後期の儒学者。天皇陵を調べ『山陵志』を著した尊皇家である。

その基盤がないと伝わらない。感性とは驚く感覚であり、大いに好奇心をいだく経験させたい。岡潔先生は「道義の根本は人の悲しみがわかることにある」と言われたが、それも感性である。

第二に人間が共同生活を送るために不可欠な文化は何かをつかみ、それを伝えることである。それが子供たちの「心の根」となり、成長の源となる。

「心の根」とは、何が自分なのか、自分を育ててくれた自然、文化、伝統を知ることである。日本のうるわしい風土や言葉。日本語は日本の最大の特色であり、大切にしたい。

「建国記念の日を祝う県民の集い」  
日時 二月十一日(土) 午後1時〜  
場所 岐阜市民会館集会室80  
内容 式典・高橋史朗氏の講演  
申込 岐阜県産業会館505  
TEL 058-278-2008へ

SDGsと日本のこころ  
高橋史朗氏  
2月11日(土)  
岐阜市民会館